

蝦夷、琉球をめぐる異国合戦言説の展開と方法

目黒将史

一 はじめに

近世中期以降多数の異国合戦軍記が生み出され享受されている。(蝦夷軍記)、(薩琉軍記)もまた近世期において多種多様に流布した異国合戦軍記の一つである。それら異国合戦言説が生み出される背景にはいったい何があるのだろうか。本稿ではシヤクシャインの戦いを描く(蝦夷軍記)、島津氏の琉球侵略を描く(薩琉軍記)を中心に、徳川幕府の日本の領土確定施策と異国合戦軍記の流布との関連性についてみていきたい。(蝦夷軍記)は、寛文九年(一六六九)のシヤクシャインの蜂起に呼応したアイヌが蝦夷地内の交易船や鷹待・金堀を襲撃した松前藩に対するアイヌの蜂起、いわゆるシヤクシャインの戦いを描いた軍記群の総称であり、(薩琉軍記)は、慶長十四年(一六〇九)の薩摩藩による琉球侵攻を、新納武蔵守と佐野帯刀との対立譚を軸に描く軍記の総称である。二つの軍記は描く地域は真逆だが、その享受の背景は極めて近似している。

二 (蝦夷軍記)の描く対外戦争

まずは(蝦夷軍記)について定義づけてみたい。(蝦夷軍記)は寛文九年(一六六九)のシヤクシャインの蜂起に呼応したアイヌが蝦夷地内の交易船や鷹待・金堀を襲撃した松前藩に対するアイヌの蜂起、いわゆるシヤクシャインの戦いを描いた軍記群の総称である。歴史的な動向を

確認しておく、当時、シブチャリ、ハエ、シユムクルのアイヌ同士が漁獵権をめぐり争いを続けていた。そこでシブチャリの首長シヤクシャインがハエの首長オニビシを刺殺するという事件がおきる。オニビシの配下が松前藩に援助を要請しシブチャリとの対決色を鮮明にするが、松前藩はこれを拒否。この使者が急死したことが松前藩による毒殺と伝えられたため、アイヌ民族による反松前の戦いへと発展していくというのが戦いの契機である。

戦いの背景には、商場知行制の展開による不等価交換や自由貿易の制限への不満があった。幕府は東アジアにおける中国(清)からの冊封体制から脱却し、独自の国家秩序をめざしており、その一環として蝦夷を松前藩を介して従属させていた。そのため、アイヌの蜂起は幕府に衝撃を与える。幕府はいち早く松前藩主の一族で旗本の松前康広を下向させ、蝦夷侵攻の指揮をとらせた。また、弘前藩に出兵を命じ、杉山八兵衛らが渡海する。松前藩は幕藩権力を後ろ盾として蜂起勢に圧力をかけ、和睦とみせかけてシヤクシャインらを謀殺した。この戦いの鎮圧により、松前藩のアイヌに対する支配が一段と強化されるのである。

この一連の流れを描くのが(蝦夷軍記)である。ただし、内容はテキストにより様々に変容しており、オニビシがシヤクシャインと組み、アイヌ一丸となって日本と戦う物語になっているものもある。テキストは写本として流布しており、海保嶺夫により多数の伝本が翻刻、紹介さ

れている。¹⁾また小峯和明は、蒙古襲来を契機にした対外的な危機感を投影した存在としてのシャクシャインや蝦夷から見た日本への視線に着目し、日本海をめぐる物語の中で義経伝説に関連させて〈蝦夷軍記〉を位置づけている。²⁾

小峯が指摘するように、〈蝦夷軍記〉は義経渡海伝承を取り込み、蝦夷に渡った崇拜される日本人の物語を展開させている。宝永七年(一七二〇)に編まれた『蝦夷談筆記』³⁾には、

義経の事をうきくると云。弁慶をハ其儘べんけいと申よし。

義経むかし此国はると云所へ渡り、多その大将の娘になちミ、秘蔵の巻物を取たりと云事をじゃうるりに作り、彼等か内にて智慧の勝れたる者ともかたり候由。

義経をハ殊の外尊敬いたし、其城跡へも足踏不仕候よし。右城跡の石垣ハしりかくと申す魚の嘴にて築立候由。右の魚嘴の長さハ、九尺、鉄のことくにて、何百年候ても腐申儀ハ無之もの、由に候。

と、義経の兵法取得譚を「じゃうるり」(浄瑠璃)に作り、その物語が語られ、義経が尊崇される存在であることが述べられている。ここでいう「じゃうるり」が人形劇なのか、はたまた口承の語りなのか定かでないが、異国に渡った日本人が崇拜され、当地で物語として語り継がれている様相がうかがい知れる。蝦夷地を探索した松浦武四郎の『蝦夷日誌』⁴⁾には、「此地ニ惣而蝦夷浄瑠璃といへるもの有て、此こと(引用者注：義経の物語)を作り述たり。其語蝦夷語なれば、通辞二聞ざればべんじがたし」とあり、浄瑠璃が蝦夷語で語られる様子を記す。これはアイヌ民族に伝わる叙事詩であるユーカラであると指摘されている。⁵⁾さらに市立函館図書館蔵『蝦夷言葉』にも、アイヌ語を片仮名で記した「義経浄留理」が所載される。⁶⁾これらのように蝦夷において義経の物語が語られ、親しまれたことは確かなようである。

また『しやむしやみん一揆之事』には、義経伝承の遺る土地に生まれ「鬼びし」と義経とが重ね合わされて語られている。⁷⁾

共節、又鬼びしと申えぞ有之候(又鬼べと云)。彼は、はあと申処より出候て、長高く、力量人に越え、軽捷の術を得て、巖石をもつたひ、高き所をもどり越え、飛鳥のごとくにて候。はあと申処ハ、むかし義経、此島へ渡り給ふ時、仮に居住の所にて、此所より出る者すべて、はあくと申候へくるとは衆と云事なり。江戸より出のものを江戸衆と云がことし。

昔、義経が蝦夷に上陸した後仮住まいした「はる」出身の「鬼ひし」の描写である。「軽捷の術」「飛鳥のごとく」など義経を思わせる描写がなされている。『北海随筆』後編には、⁸⁾「此ヲニビシと云は、ハイと云所に生れ、豪勇智力共にありて道理よき者故に、近辺の夷人共多くヲニビシを親みけり。ヲニビシ元来本邦を尊信し、松前領主え服従して、能く夷人をも撫け治めて、松前領主えは忠義あり」と、「ハイ」に生まれ、シャクシャインと対立した「ヲニビシ」が松前藩に忠義を尽くし、日本側を尊崇していたことが述べられている。

義経の物語を語る〈蝦夷軍記〉として『夷蜂起物語』は外せない。⁹⁾この二段には「白老国の夷」の前で大将「ましたるん」が日本と合戦することの不利を説く場面が描かれるがそこに義経兵法取得譚が用いられているのである。

簡単に物語を記すと、いにしえの大王「八面大王」のもとに「うきぐるみ」と名を変えた義経が訪れ、大王を謀り、大王の息女「朝日天女」の婿になる。義経の目的は「虎の巻物」であり、姫の導きにより巻物を得た義経は日本へと帰国する。これに激怒した大王は日本へ攻めていく。奥州南部から入った蝦夷軍は伊豆国まで攻めるが、富士浅間大菩薩、箱根の権現、三島大明神が悪風を吹きかけ撃退し、大王は奥州米沢まで退

く。そこへ「日本六拾余州の大小の神祇」が攻めかかると大王も震動、雷電、霹靂神、火炎を吐き、剣を吹きかけ応戦するが、「伊勢の神風」によりすべて蝦夷軍側に吹き返される。ずたずたにやられた蝦夷軍の血を含んだ雪が今も降るといふ。「ましたるん」は、この先例をうかがうに日本と戦って、仮に人間を滅ぼしても、仏神が顕れ、たちまちに天罰を被るだろうとする。

松前藩側と戦うことの無益を説くために義経の物語であるが、ここでは日本の神々と蝦夷の悪鬼との戦いにすり替わっている。まさにこれは日本が夷狄に勝利する物語であり、異国に勝つ言説として義経伝承が用いられているのである。『松前蝦夷軍記』を基にした『松前狄軍記』にも同様の内容がみえ、多様に流布したのであろうことがうかがい知れる。

この他にも、『津軽一統志』巻十には蝦夷図を載せるが、ここには「御曹司島渡り」などの義経渡海譚に機縁するかと思われる「小人島」「女島」などが描かれている。この『津軽一統志』は享保十六年（一七三二）に津軽藩で編まれた藩史であり、津軽藩の蝦夷における信政の功績として描かれているのだ。

これらが描くように、〈蝦夷軍記〉において、蝦夷に渡る先例としての義経の伝承は欠くことのできない物語なのである。

三 近世における蝦夷、琉球言説と新井白石

絵図で注目されるのは、正保国絵図だろう。正保元年（一六四四）、幕府が各藩に命じて国絵図を作成させる。志立正知は、十七世紀の幕府による修史事業、国絵図の整備などの事業を「幕府・徳川家を中心とした日本の歴史・地理に関する知の再編」であるとしている¹⁹。それはまさに江戸中期における幕府の領国確定施策と言えるだろう。義経の蝦夷渡海伝説が語られ始めるのも、まさにこの時期である。『本朝通鑑』巻

七十九「後鳥羽天皇七」には、「俗伝又曰、衣川之役、義経不_レ死、逃_二到蝦夷島_一、存_二其遺種_一」¹⁹とあり、俗説として、義経は平泉で死なず、その子孫が蝦夷にいとされる。『本朝通鑑』は徳川幕府による修史事業の一環として林羅山によって寛文十年（一六七〇）に編まれる。この前年にはシャクシャインの戦いがあったので、当然その視野は蝦夷の統治に及ぶものであろう。

この『本朝通鑑』の内容を受け継ぐのが、新井白石の『蝦夷志』である²⁰。『蝦夷志』の「蝦夷」項には、蝦夷の人々は祭壇を設けず義経を神として祀り、東部に旧跡が遺っていて、蝦夷の人々が恐れ敬う様子が語られる。また、義経がアイヌの創世神である「オキクルミ」に比定され祀られること、義経の旧跡は「ハイ」と、その人々は「ハイクル」と呼ばれることが述べられている。これは先に引用した「しゃむしやめん一揆之事」の内容に通じる。

また、「序」には、「蝦夷」曰「毛人」。古北倭也（北倭出_二山海経_一）とあり、蝦夷は「北倭」であり、「北倭」は「山海経」に出てくるという。これにより蝦夷は倭（日本）であることの根拠とするわけだが、「北倭」が『山海経』に出てくるというのは、『山海経』の誤読によるものである。『山海経』巻十二「海内北経」には、「蓋国在鉅燕南倭北倭属燕」とあり、これは「蓋し、国は鉅燕の南、倭の北に在り。倭は燕に属す」と訓読する²¹のが正しいかと思うが、これを「蓋し、国は鉅燕に在り。南倭、北倭は燕に属す」と訓読すると、「南倭」と「北倭」が誕生するのである。ただ、新井白石は名高い漢学者として知られており、このような誤読をすることには、いささかの疑問がある。作為的な誤読を疑う余地は大いにあると考えられよう。『蝦夷志』より先んずることになるが、新井白石は『南島志』においても「北倭」を蝦夷に、「南倭」を琉球に結びつけている。²²「総序」に、「古北倭、後所_レ謂蝦夷」「亦是古南倭、後所_レ謂

流求」とあり、蝦夷と琉球を日本の一部として位置づけるのである。

これは先に述べた絵図にもつながる。正保国絵図の「琉球図」は新井白石『南島志』に引き継がれるのだ。さらに『南島志』は〈薩琉軍記〉の諸本の一つである『琉球属和録』に引き継がれていく。『琉球属和録』は琉球への渡海図を描く。そこには現実世界と〈薩琉軍記〉世界との融合した世界が描かれているのだが、その世界構想に『南島志』が大きく影響しているのである。一例をあげると、『琉球属和録』巻四「浮田秀家依⁽¹⁵⁾薩摩」、薩摩へ落ちのびた宇喜多秀家の言葉の中に義経伝説が織り込まれるくだりに確認できる。⁽¹⁶⁾

昔源九郎義経、平家を追伐ス。功成ツて後、兄頼朝と不和に成り、都を落て吉野にかくる。又西海に趣かんとす。しかれども、頼朝の威、日本に満て、義経終に足を入るるの地なし。漸に奥州秀衡がもとに有といへども、頼朝の代終に動クべからざるを知ツて、蜜かに蝦夷が島に渡れりと聞及びたり。蝦夷ハ北倭なり。又奥州に隣ルが故也。今此薩摩ハ琉球に隣ル。琉球ハいにしへの南倭也。我其例にならふて、南倭へ渡り、琉球国を押領せんと欲す。願ハくハちからを助ケたまへ。

秀家は琉球は「いにしへの南倭」であるため、「北倭」に渡った義経の先例に基づき、琉球に渡って琉球を支配しようと思うので、薩摩の力を貸すように要請するのである。薩摩の助力を得て、秀家は琉球へと侵攻するも大潮に遇い撤退することになる。ここにいう蝦夷が北倭であり、琉球は南倭であるという考えは、まさしく『南島志』によるものであり、新井白石の言説に大きく影響されている様子がみられる。『琉球属和録』と新井白石のつながりについては後述する。

『琉球属和録』に描かれる義経の物語には続きがある。蝦夷に渡り「キクルミ王」となり、子孫は多田満中に由来する「満中」という国を建国

する。そして満中から韃靼の大王が生まれ、清を建国するというのである。さらに『琉球属和録』には琉球における為朝の物語も語られている⁽¹⁷⁾。つまり、北の言説に義経を利用し、南の言説に為朝を利用しているのである。

義経渡海言説については『御曹子島渡り』が早い例であるが、近世以降、義経生存説が広まっていく。そして林羅山『本朝通鑑』において義経蝦夷渡海説が初めて語り出される。羅山の『本朝通鑑』は幕府の修史事業の一環であり、そこには徳川幕府の思惑が介在する。そして、それを引き継いだのが新井白石であり、「北倭」「南倭」論の展開の基点になっていくのである。

四 〈薩琉軍記〉を介した琉球認識の展開

― 『琉球属和録』を中心に ―

次に琉球側、〈薩琉軍記〉についてみていきたい。〈薩琉軍記〉の詳細については先論に譲り、簡潔に記しておく⁽¹⁸⁾。〈薩琉軍記〉は、慶長十四年（一六〇九）の薩摩藩による琉球侵攻を、新納武蔵守と佐野帯刀との対立譚を軸に描く軍記の総称である。琉球侵攻を題材にしているが、実際には起きていない架空の合戦を作りだし、様々な武将たちの活躍を創出している。新納武蔵守一氏が軍師に任せられ琉球侵攻の指揮をとり、佐野帯刀が活躍する物語を有するのが〈薩琉軍記〉の大きな特徴である。

ここでは、〈薩琉軍記〉の諸本の一つ、『琉球属和録』に注目する。『琉球属和録』は、〈薩琉軍記〉全体が他の物語を取り込んだり、または取り込まれるなどして全面的に改編された増補系の諸本である。本稿では、『諸本』の意味合いを広く解釈し、新納武蔵守と佐野帯刀との対立譚を主軸とする基本となる物語を有しているテキストを〈薩琉軍記〉と定義するため、これらの作品も〈薩琉軍記〉諸本として加えてある。

『琉球属和録』は、加賀出身の誹諧師であり、実録作者として名高い堀麦水の手によるものである。本文末尾に「于時明和三年丙戌のとし、長門の長夏を徒らに過ぎとみだりに調ズ」とあり、明和三年（一七六六）の夏に著された旨が語られているため（薩琉軍記）としては珍しく成立時期がはっきりしている。麦水の手による書写本が複数存在しているが、麦水の没年が天明三年（一七八三）なので、天明年間以前には書写は完了していたのだろうと思われる。

物語は十五巻に及び、〈薩琉軍記〉諸本中でも最も増補された類のものである。内容は加賀藩二代藩主前田利長の存在際だった章段が加わるのが特徴である。麦水の出身地である加賀ゆかりの人物が主要人物として改変されているわけだが、豊臣秀頼、真田幸村など関ヶ原合戦に敗れるなどして薩摩に身を寄せるという言説は、江戸期において数多くあるものの、加賀藩主である前田利長が琉球について語るといふ言説は見受けられない。

先にも述べたが、『琉球属和録』では新井白石の『南島志』を引用しており、琉球を南倭、蝦夷を北倭とし、日本の中の属国であるという認識が働いている。巻一「琉球国初」では新井白石言説の受容をはっきりと指し示している。

白石荒井先生の南島志、僧袋中和尚の南遊の記等を見るに、鴻荒の世、二箇の神人おり、炎海の洲に来たり、一男一女となつて、固みて三子を産む。其一を君長のはじめとし、其二を女祝のはじめとし、其三を民庶のはじめとす。或ハいふ、三男二女なり。長男を君とし、天孫氏となづけ、中男を按司となし、少男を蒼生となす。又長女を女君となし、少女を内侍となすとも云。二神の名、男をシネリキユ、女をアマミキユと云。天孫氏、世々伝えて、一萬八百余年と云。

これは琉球の創世神話であるアマミキユとシネリキユをめぐる物語である。

。ここでは『南島志』を引用していることを明言している。そしてアマミキユとシネリキユの間に生まれる子たちについて、三子説と三男二女説の両説を引いているのである。琉球の創世神話について、袋中の『琉球神道記』は三子説を採り、琉球の史書である『中山世鑑』は三男二女説を採る。『琉球属和録』は袋中の「南遊の記」（『琉球神道記』のこと）を指すと思われる）を披見するとするが、以下の『南島志』上巻「世系第二」と読み比べてみると、『琉球神道記』を管見に入れていかは疑わしい。

鴻荒之世有二神、而降于炎海之洲、一男一女因生三子。其一為君長之始、其二為女祝之始、其三為民庶之始。遼古濶遠、歷世綿邈、国無史書、厥詳莫聞。

慶長間、僧袋中南遊、輯録異聞。其略如此。中山世図云、大荒之世、有二男一女、因生三男二女。長男為君王之始、号曰二天孫氏。中男為按司之始。少男為蒼生之始。長女為二女君之始。少女為二内侍之始。天孫氏世世伝統一萬八百余年、其代数不詳。

比較してみても分かる通り、『琉球属和録』の内容は『南島志』に拠るとみてよい。袋中の「南遊の記」とするのは、「僧袋中南遊し、異聞を輯録す」とあるのに拠るものだろうが、『南島志』で「異聞」とするものを『琉球属和録』では『南島志』と並列に並べていることは興味深い。創世神話の内容から『琉球属和録』が『南島志』を下敷きにしており、『琉球属和録』の描く世界認識が、新井白石の言説の影響下にあることに間違いないことがわかる。そしてここには琉球を南倭、蝦夷を北倭とする思考が働いており、琉球、蝦夷は日本の中の属国であるという認識につながっていくのである。

江戸前期において、東アジア諸国を揺るがす一つの事件があった。明

の滅亡と清王朝の誕生である。清は東アジアの支配領域の確定に乗り出し、江戸幕府もその流れに巻き込まれていき、白石は江戸幕府による国家政策の一環として、日本国土の支配域の確定をめざしていく。そして、それは異国を日本の属国とする根拠として武人伝承を取り込み、説話を再生していく様相を生み出す。つまり、ここでは琉球を南倭とするよりどころに為朝、蝦夷を北倭とするよりどころに義経の言説が利用されているのである。『琉球属和録』では他に百合若大臣説話の語り換えもなされている。いわば異国合戦言説を必要とする世相が、武人伝承などを再生産することにより、〈蝦夷軍記〉や〈薩琉軍記〉といった異国合戦軍記が誕生し、展開していくのである。

五 異国合戦言説の展開とその背景

近世期には〈蝦夷軍記〉、〈薩琉軍記〉、義経渡海伝承、為朝渡琉譚のみならず、多くの異国合戦言説が生み出されている。とくに享保期ころから異国を意識した言説が芽生えていき、幕末に再度それらの言説が語り出されている。異国合戦言説が必要とされる背景として清王朝の誕生、欧米諸国や露西亞の東アジアへの進出など日本を取り巻く対外状況の変化があるだろう。〈薩琉軍記〉の描く琉球侵略を「歴史」として認識し享受されていた根拠として『日本外史』があげられる。巻二十一「徳川氏正記」には次のようにある。

これより先、島津家久、教を奉じて琉球を招く。琉球至らず。請うてこれを討つ。この歳暮、その将新納一氏を遣し、八千人に將として南伐す。樺山久高、先鋒たり。東求島に抵り、琉球の戍兵三百を執ふ。夏、難巴津を攻む。虜、鉄鎖を以て船を聯ね、津口を扼守す。而して津傍に山あり。險にして蛇蝎多し。虜、恃んで兵を置かず。我が軍、火を放つて山を楮にして上り、進んで楊腰灘を奪ひ、千里

山に戦ふ。利あらず、転じて朝築城を攻めてこれを抜く。

新納一氏が登場することから『日本外史』が〈薩琉軍記〉を利用していることに間違いない。『日本外史』は文政十年（一八二七）、頼山陽によって著され松平定信に献ぜられ、幕末に広く流布し、大きな影響を与えた。そこには学問所などを通じた言説の伝播もあったであろう。

同時代の琉球王の書翰からも時代情勢をうかがい知ることが出来る。次に引用するのは韓国国立故宮博物館蔵「中山王尚敬書状」である。

一翰謹呈し候ふ。有草院様、去年四月晦日に薨御の段、同九月に承知仕り奉り言語に絶え候ふ。茲に因り、吊慰を伸べ奉るべきため、使者川平親方を今度薩州へ差し越し候ふ。薩摩守より申し上ぐべく候ふの条、御執り成しを頼み奉り候ふ。誠惶謹言。

五月三日（引用者注：享保二年（一七一七）） 中山王尚敬（花押）

謹上 土屋相模守様

これは琉球王尚敬が江戸幕府老中に宛てた書状で、第七代將軍徳川家継（有草院、一七〇九―一七一六）の死去を弔うものである。家継は第六代將軍家宣の四男であるが、兄たちが相次いで死去し、正徳二年（二七二二）、新井白石や間部詮房を後見として若くして將軍になる。しかし、正徳六年（一七一六、六月に享保に改元）四月三十日、わずか八歳で死去している。琉球王書翰について、正徳期になると琉球が異国であるという認識がなくなり、附庸の国であるという面を重視するようになったとする指摘がある。一方で、宝永七年（二七一〇）の江戸上りにおいて、薩摩藩が琉球に対してあらゆる面で中国風の装いをするように命じたことや、將軍の「日本国大君」から「日本国王」への復号、琉球王の「琉球国司」から「琉球王」への復号がなされたことから、異国を支配している武威の国としての日本を確立していくなかで新井白石による対外的な秩序の再編成が行われていたという指摘もある。両者の論が

指摘するように、幕府は旧来の手法からの脱却を図っていたわけだ。つまり、この書翰が送られた時期は、幕府による日本の領域を見直している時期と重なる。そして、異国合戦言説が多数生み出されるのもこの時期である。幕府による異国に対して意識転換、改革がなされていた時期と異国合戦物語が創出される時期とが重なり合うのは偶然とは言いがたろう。

同時期に琉球で広く享受されたものに『御教条』がある。²⁷『御教条』は、一七三二年、蔡温らによって布達された文書であり、木版で大量に流布し、近世琉球における実践道徳を記した修身書とされる。『御教条』の様相を探る上で少し長くなるが引用してみたい。

御当国（引用者注：琉球）の儀、**天孫子**、**開国**あそばされ候へども、**御政法**または**礼式**などと申すことも、しかじかこれなく、ことに小国のことにて、何篇、不自由にまかりあり候ふところ、その末の御代より、ほうぼうへ渡海いたし、その働きをもつて、ようやくながら国用管合おき候ふ。しかれども、諸間切において、諸按司、心しだいに城をかまえ、おのおの威勢を争い、年々兵乱さしおこり候ふゆえ、上下万民の憂いはもちろんのこと候ふ。

右の時節、**唐より封王**これあり候ふについて、礼法惣体の儀は、まづもつてあい立ち候へども、国中万事の儀については、前代とさしてあいかわらず、あまつさえ、兵乱ほうぼうよりさしおこり、国中の騒動、言語道断の仕り合い候ふ。その後、ようよう兵乱の儀はいしずまり候へども、右どおりのしだいについて、**御政法**ならびに**風俗**まで、**だんだん**よろしからざる儀、これありたること候ふ。

しかるところ、**御国元**（引用者注：薩摩）の**御下知**にあいしたが**い候ふ**以後、国中万事おぼしめしのとおりあい達し、**御政法**、**風俗**までようようひきあらたまり、今もつて上下万民安堵つかまつり、め

でたき御代まかりなり候ふ儀、まことにもつて、**御国元**の御厚恩をこうむり、**くだん**のしあわせ**冥加**しこくの御事候ふ。

右のしだい、前代のことにて、無案内の方もこれあるべく候ふあいだ、おのおの納得のため、申し達し候ふ。この儀、とくとその意を得、老若男女ども、ありがたきしあわせに存じたてまつるべきこと。

ここでは琉球の政事や礼法などは天孫子が開闢して以来整っておらず、中国との冊封体制をとつてもそれは改まらなかつたが、薩摩の下知に順つてからは政事や人民の状態が整つてきたことを述べる。これはまさしく教育を通じた教化策であり、薩摩の琉球支配を物語るものである。しかし一方で、琉球は日本（薩摩）との関係を隠蔽し、対外的に「独自の王国」を装っていたという指摘がある。²⁸一例をあげると、蔡温本『中山世譜』巻七には、朝鮮、日本、暹羅、瓜哇等国、互に「相通」、本国孤立、国用復欠。幸有「日本属島、度佳喇商人、至」国貿易、往来不「絶」とある。²⁹ここには琉球が朝鮮、日本、シャム、ジャワなどと交流がなく孤立していること、日本の属国であるトカラ商人と貿易をしていることが述べられており、日本との交流がないように装われている。これらを鑑みるに、『御教条』の内容も表面だけを読んでいたのでは本来の意味を捉えきれないのではなからうか。日本が琉球との関係性を転換していた時期に、同じく琉球でも蔡温らを中心に琉球王国の立場を見直していたわけである。蔡温がいかなる思いを持って薩摩支配の中で叙述を進めていたのか、さらなる追究が必要だろう。

先にも指摘したように、江戸中期から幕末にかけて欧米諸国や露西亜の東アジアへの進出が盛んになり、そのため「異国に勝つ物語」の需要が高まっていく。その背景をうかがう意味でも日本と異国相互からの視線で分析していく必要性があり、そのためにも学際的な研究が求められているのである。

六 結語

近世期において、シャクシャインの戦いを描く〈蝦夷軍記〉や琉球侵略を描く〈薩琉軍記〉などの異国合戦軍記は多様な流布を展開している。その展開の背景には、徳川幕府の異国対策、国家施策としての領土確定政策があり、新井白石はその施策を文章で体言化していく。白石の論は蝦夷を北倭、琉球を南倭として日本化していく論調の基点になっていくのだ。この考えは異国合戦軍記にも大きく影響し、〈蝦夷軍記〉〈薩琉軍記〉享受や流布の下支えになっていくのである。

〈蝦夷軍記〉が源義経の蝦夷渡海譚、〈薩琉軍記〉が源為朝の琉球渡海譚を取り入れることもその一端であり、異国である蝦夷や琉球の建国神話や神として崇拜される存在にヤマトの武士の物語を採用されることは、異国を日本化（ヤマト化）していくことに通じる。

本稿では〈蝦夷軍記〉〈薩琉軍記〉を中心に、蝦夷と琉球を問題にしてきたが、異域をめぐる合戦言説は東アジア全体に及ぶものである。とくに秀吉の朝鮮侵略を描く〈朝鮮軍記〉、島原天草の乱を描く〈天草軍記〉などは同時代に流布した作品として見逃すことができず、さらなる考察が必要だろう。

注

- (1) 海保嶺夫『北方史料集成』4（北海道出版企画センター、一九九八年）。また、『日本庶民生活史料集成』4にも、『蝦夷蜂起』や『寛文拾年狄蜂起集書』などのテキストが収められている。
- (2) 小峯和明「古典文学に見る日本海―〈海域・海洋文学〉の可能性―」『解釈と鑑賞』69―11、二〇〇四年十一月。
- (3) 引用は、注(1)『北方史料集成』4による。松宮観山の著書。

海保は幕府系統資料として位置づけている。

- (4) 引用は、秋葉実『校訂蝦夷日誌』一編（北海道出版企画、一九九九年）による。
- (5) 『校訂蝦夷日誌』頭注。
- (6) 田中聖子『蝦夷言葉』の「義経浄留理」について―近世のアイヌ口承文芸の記録に関する一考察―（『早稲田大学語学教育研究所紀要』38、一九八九年三月）。
- (7) 引用は、注(1)『北方史料集成』4による。海保は幕府系統資料として位置づけている。山括弧は割り注をさす、以下同様。
- (8) 『北海随筆』は幕府金座役人の坂倉源次郎の蝦夷金山の見聞記であり、元文四年（一七三九）に成る。引用は、注(1)『北方史料集成』4による。
- (9) (1)『北方史料集成』4による。海保は松前藩系統資料として位置づけている。
- (10) 志立正知「近世地誌にみる〈いくさ〉の記憶」〔文学〕16―2、二〇一五年三月）。
- (11) 引用は、林恕撰『本朝通鑑』（国書刊行会、一九二〇年）による。またここには、弁慶の死後、容貌が多数描かれ、あるいは造られ、それが蝦夷や大陸に渡り鍾馗とともに祀られることも記されている。
- (12) 享保五年（一七二〇）成立。引用は、新井白石全集による。
- (13) 「北倭」「南倭」の記述は、松下見林『異称日本伝』（元禄元年（二六八八）成立）にもみえる。この記述については、早く立原翠軒により批判されている。立原翠軒は水戸彰考館総裁であり、松平定信に蝦夷侵略を警告した人物としても知られる。参考、横山健堂『薩摩と琉球』（中央書院、一九一四年）。
- (14) 享保四年（一七一九）成立。引用は、新井白石全集による。

(15) 拙稿「(薩琉軍記)概観」(池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学—東アジアからのまなざし—』三弥井書店、二〇一〇年)、拙稿「薩琉軍記について」(『史苑』70-2、二〇一〇年三月)。

(16) 引用は、加賀市立図書館聖藩文庫蔵本による。

(17) 小峯和明「(侵略文学)としての(薩琉軍記)と為朝神話」(島村幸一編『琉球交叉する歴史と文化』勉誠出版、二〇一四年)、拙稿「琉球言説にみる武人伝承の展開—為朝渡琉譚を例に—」(『中世文学』55、二〇一〇年六月)、拙稿「(薩琉軍記)における渡琉者たち—円珍伝と為朝渡琉譚をめぐる—」(小峯和明編『東アジアの今昔物語集—翻訳・変成・予言』勉誠出版、二〇一二年)。

(18) 「(薩琉軍記)について、詳細は以下の拙稿を参照していただきたい。なお、他の注でふれたものは割愛した。「(薩琉軍記)物語生成の一考察—近世期における三国志享受をめぐる—」(『説話文学研究』46、二〇一一年七月)、「琉球侵略の歴史叙述—日本の対外意識と(薩琉軍記)—」(青山学院大学文学部日本文学科編『日本と(異国)の合戦と文学日本人にとって(異国)とは、合戦とは何か』笠間書院、二〇一二年)、「異国戦争を描く歴史叙述形成の一齣—(薩琉軍記)の成立と享受をめぐる—」(『アジア遊学』155、勉誠出版、二〇一二年七月)、「立教大学図書館蔵(薩琉軍記)コレクション」をめぐる「(立教大学日本文学)111、二〇一四年一月」、「(薩琉軍記)にみる武将伝」(『アジア遊学』173、二〇一四年三月)。

(19) 加賀市立図書館聖藩文庫蔵本、国立国会図書館蔵本および国立公文書館蔵本が麦水の自筆本として認められる。国会本、国立公文書館本は元ツレである。

(20) 「琉球属和録」の成立年である明和三年(一七六六)は明和期に

おける琉球ブームとも重なるが、流行の影響をどこまで受けたかは定かでない。成立について、前田家とのつながりで考えるべきか、さらに琉球使節が通る沿線から遠い加賀にも琉球ブームが波及していたかも考察にいれる必要があるうか。

(21) 引用は、岩波文庫による。また、「(薩琉軍記)などの異国合戦言説が享保期ころから芽生えていき、幕末に再度それらの言説が語り出されていることについては、拙稿「(薩琉軍記)の歴史叙述—異国言説の学問的伝承—」(『文学』16-2、二〇一五年三月)を参照。

(22) 引用は、韓国国立故宮博物館蔵文書による。

(23) 尚敬(一七〇〇—一七五一)は、第二尚氏王統第十三代国王、蔡温を三司官(琉球王府の実質的な行政の最高責任者)に据え、前代の修史事業を引き継ぎ、琉球の史書『中山世譜』の改修や、遺老伝の集成である『琉球国由来記』の編纂を行い、『御教条』を發布して農村への儒教倫理を広めるなど、多くの改革、文化振興を押し進め、近世の名君と称された人物。

(24) 韓国国立故宮博物館にはほかに五点の書翰がある。月光院(家宣の側室、家継の母)と天英院(家宣の正妻)に宛てたものもあり、当時の大奥における両者の権力争いの様相(江島生島事件)をうかがう上でも貴重な史料である。

(25) 梅木哲人『近世琉球国の構造』(第一書房、二〇一一年)。

(26) 紙屋敦之『幕藩政国家の琉球支配』(校倉書房、一九九〇年)。

(27) 引用は、高良倉吉『御教条の世界—古典で考える沖繩歴史—』(ひるぎ社、一九八二年)による。

(28) 注(26) 紙屋論文。

(29) 引用は、琉球史料叢書による。引用箇所は蔡鐸本にはない。

【付記】 本稿は、立教大学日本学研究所主催第52回研究例会「〈異域〉をめぐる文学―異域から日本を考える―」（於立教大学）における口頭発表に基づくものである。発表後、多くの方々からご教示、ご意見をいただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「異国合戦の歴史叙述―〈薩琉軍記〉にみる琉球侵攻―」（課題番号25・9592）の成果の一部である。

（めぐろまさし 日本学術振興会特別研究員）